



Title	<書評>Asad Haider, Mistaken Identity: Race and Class in the Age of Trump, Verso, 2018年, 144頁, \$12.99.
Author(s)	安藤, 歴
Citation	未来共創. 2021, 8, p. 334-336
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83911
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Asad Haider

『Mistaken Identity: Race and Class in the Age of Trump』

Verso, 2018年, 144 頁, \$ 12.99.

安藤 歴

2020 年の新型コロナウイルスによるパンデミックの中、アメリカではブラック・ライブス・マター（以下 BLM）の運動が盛り上がった。2013 年に警察官による黒人の虐殺に対してオンラインから始まった BLM 運動は路上へと場所を移し盛り上がった。この運動は 2016 年の大統領選に向けた選挙運動に取り込まれ、それがもともと持っていた勢いを削がれてしまったが、終わりなく蔓延する警察官の暴力と虐殺への不満はジョージ・フロイドの首が踏みつけられた 8 分 46 秒とともに抑えきれなくなり、人々は再び路上に出て立ち上がった。

本書 “Mistaken Identity” は以上のような状況が鋭く問題化された現在を読み解く上で、重要な議論を提示している。著者のアサド・ハイダーは現在、ニューヨークのニュースクールに教員として所属している。彼は View Point Magazine の共同創立者の一人であり、レイシズムやマルクス主義、アイデンティティー・ポリティクスについて Verso や Jacobin などに寄稿している。本書の序章で自らのルーツについて述べているが、彼はパキスタンからアメリカに移民した二世である。本

書が中心的主題として取り上げる「アイデンティティー」への関与は、9・11 を幼少期に経験し、「見た目」から明らかな異郷のルーツを「オサマ!」というクラスメートの言葉から自覚する中で育まれたようである。

本書のタイトルが示すように、ハイダーはアメリカを中心とした反人種差別運動・思想の歴史を振り返りながら、現代の「アイデンティティー・ポリティクス」への批判を行っている。彼は第一章の冒頭でボストンの黒人レズビアングループとして活動したコンバイ・リヴァー・コレクティブ（1974-1980）を取り上げる。このグループは、自己の具体的な経験と個別的アイデンティティーに根付いた政治を思い描き、「アイデンティティー・ポリティクス」という言葉を政治的発言の内に生み出した。単に女であるだけでも、黒人であるだけでも、レズビアンであるだけでも労働者であるだけでもない。自分たちはそれら全てを具体的に生きる人間であり、この具体性から政治実践を構想することが必要だと宣言したのである。この議論は Kimberlé Crenshaw が法学の問題として論じ一般に広まった「インター・セクショナリティ」、つ

まり「シングル・イシュー」型の政治要求は特権的な地位にいるメンバーに集中することになり、異なるアイデンティティーを持つメンバーを従属的な地位に置くという議論ともつながっている。ハイダーが明確に論じるように、以上のようなアイデンティティーに基づく政治実践と思想が論じていたのは、様々なアイデンティティーに基づく主体とその要求との「同盟」(coalition)を作り上げることであった。つまり、複合的なアイデンティティーに編まれた具体的な「私たち」が自分たちの状況に対して活動をするだけでなく、異なるアイデンティティーと状況に直面する他者との関係に身を置いた政治実践を行うことが目指されていた。

しかし、「アイデンティティー・ポリティクス」の歴史は転倒して継承されてしまっているとハイダーは指摘する。「アイデンティティー」は他者との差異を強調する側面が押し出され、迫害されたものとしての自己表象に基づいた一体性として捉えられてしまう。「アイデンティティー」、「インター・セクショナルリティー」、「特権」といった言葉は、アメリカ大統領選でバーニー・サンダースの「バーニー・ブラザーズ」(つまり経済問題ばかりを主張するマッチョ

な男たちというレッテル) に対して、ヒラリー・クリントンを「マイノリティーの代表」として表象するために使われるに至る。マイノリティーが生き延びるために、そして戦うために生み出した概念、思想、実践はマジョリティーに横領され、差別的関係を温存するためにさえ用いられる。“Mistaken Identity” というタイトルに表された問題設定は以上のようなものである。

これに対して、ハイダーは黒人解放運動や反人種差別運動の歴史を参照軸にしながら「アイデンティティー」の特殊性には還元されない理論と実践を描くとともに、70年代以降のアメリカ社会で黒人が置かれた状況を論じ、資本の側だけでなく人種差別に反対する側も、人種を固定化された所与の実体として捉えて政治的分析を行うことで人種に基づく分断を進めてしまっていることを批判している。ハイダーはロナルド・レーガンやマーガレット・サッチャーからトランプまで続いてきた「新自由主義」と呼ばれる資本の再編成やその枠内でのナショナル・アイデンティティーの称揚に対して、政治的アイデンティティーを個別化することでしか対応できなかった左派の現状を標的としている。第二章では、蜂起する大衆

とそれを「代表する」と称する黒人エリートの間の矛盾が指摘される。そもそもBLM運動がアメリカ初の黒人大統領のもとで生じたことには、公民権運動が一定の成功を収めて以降に拡大した、黒人共同体内でのエリート層と貧困層の分化の帰結が見て取れる。第三章では、人種それ自体の廃絶というヴィジョンなしに黒人を犠牲者として、白人を特権階級として表象する「人種イデオロギー」が批判されている。第四章では、自己を黒人であると偽る白人の学者や活動家の例から、「黒人」という属性への同一化が「政治的」な価値を与えられるという現代の政治実践の条件が批判される。社会運動における具体的組織性なしでは、個人で「政治的」になる過程が「アイデンティティー」の問題として構想されるしかないのである。第五章では、新自由主義における社会状況やメディア環境の変化に応じた政治的「ヘゲモニーの危機」という状況の中で、白人や黒人という人種的分断にとらわれず階級闘争の組織化へと向かうべきことが主張される。最終章で、ハイダーは具体的な状況での具体的な個人から発する「蜂起する普遍性」(insurgent universality)を評価し、それをリベラリズムの法的な

普遍性と対比している。つまり、法権利という抽象的な普遍性ではなく、具体的な権利の要求主体に存する自己解放的な普遍性から政治を構想することを主張している。

本書でハイダーは黒人解放運動の歴史や理論に細かい目配せをしながら、現代の批判理論を多く参照しており、アメリカでの反人種差別の理論的水準を推し量ることができる。本書の根本的主張は、「アイデンティティー・ポリティクス」が個人や集団の「犠牲者」としての自己意識に基づくものに妥容させられている中で、大衆蜂起に基づいた普遍性の探求が政治実践として追及するべきものだという点である。現在を生きる私たちが具体的な状況に読み取るべきことは個別的でありながら全体的でもある政治実践の契機であるというハイダーの提起に評者は全面的に同意する。